318 Span-1 RIABEADの臨床的検討

増岡忠道，松枝由美，米澤久子，安井俊行
（日本鋼管病院 RI科）
三本重治 （横浜市民病院）
加藤秀夫 （警友病院）

膵癌及び消化器癌患者の血中に、高率に存在するといわれるSpan-1を中心に、CA19-9，CA-50，NCC-ST-439，CEA，SLX等の腫瘍マーカーについて、膵癌における臨床上の特異性について検討した。その結果、Span-1は現在一般に膵癌に使用されている腫瘍マーカーの中では89%と最も陽性率が高く、その有用性が認められた。またルイス式血液型にも測定値が左右されないことが認められた。Span-1測定キットが膵癌の新しい腫瘍マーカーとして診断と経過観察のモニターとして有用であることを強調したい。

319 PTCD施行症例における血清Span-1ならびに血清CA19-9の変動についての比較検討

松本俊郎、村中 光、花田清彦、松浦泰雄、鷲海良彦
（国立福岡中央病院放射線科） 大神吉光（国立福岡中央病院内科）

糖鎖抗原Span-1は、1985年鄭らにより作製された単クローン抗体が認識する膵癌関連抗原であり、CA19-9同様、膵・胆道系の腫瘍マーカーとして最近高く評価されている。今回我々は、経皮的胆管ドレナージ(PTCD)による減黄術を施行した悪性閉塞性黄疸患者16例（胆道癌11例、膵癌5例）を対象に胆管閉塞、および随伴する胆管炎が血清Span-1値に及ぼす影響について、CA19-9との対比をもとに検討を行った。

結果は減黄効果がみられた胆道癌10例中9例、膵癌5例中1例で著明な血清Span-1値の下降を認め、いずれもCA19-9とほぼ同様な動きを示した。

320 新しい膵癌関連抗原SPan-1測定キット“SPan-1 RIABEAD”の基礎的ならびに臨床的検討

細野 真、遠藤啓吾、渡辺祐司，中島言子，阪原晴海、佐賀恒夫、中井敏晴、小西淳二（京大・医・放核），馬場信雄、真辺忠夫、戸部隆吉（同・一外）

SPan-1抗原は高分子ムチン様糖蛋白質で、消化器癌に高頻度に存在する。今回、SPan-1測定用キット“SPan-1 RIABEAD”の基礎的ならびに臨床的検討を行ったので報告する。再現性、回収試験、希釈試験などの基礎的検討の結果は良好であった。カットオフ値を30U/ml（平均値＋3S.D.）とすると膵癌(81%)、胆道系癌(62%)に高い陽性率が得られた。手術後、血清SPan-1濃度は速やかに低下し、臨床経過をよく反映した。CA19-9とは有意の相関を示したが、Lewis 血液型陰性の膵・胆道系癌患者で、CA19-9陰性・SPan-1陽性例がみられ、SPan-1抗原は膵・胆道系の優れた腫瘍マーカーである事が示唆された。

321 膵癌でのSPan 1の測定

本庄恭補、上原総一郎、平山亮夫（斗南病院内科）
中村孝行（同放射線科）

膵癌の腫瘍マーカーとして現在、種々のものが報告されている。そこで、KimらによるSPan-1のRIA（ダイナボット）を用いて膵癌を中心に測定を行なった。

【対象と方法】 健常者20例の他、膵癌23例、慢性膵炎57例の他肝癌6例、胃癌8例等である。SPan1の他、膵癌腫瘍マーカーとしてCA19-9、POA、SLX、CEA、Elastase-1、PSTI を測定した。【成績】①SPan-1の膵癌陽性率は20/23(87%)であり、腫瘍の進展で上昇、切除により低下するのを認めた。②他のマーカーとの比較ではCA19-9が20/23(87%)、POA8/20(40%)、SLX7/20(35%)等であり、特にCA19-9との関係ではSPan 1陽性でCA19-9陰性が2例、両者共、陰性が1例存在した。【結論】膵癌診断の手段としてSPan-1の測定は有用であると考えられた。

Presented by Medical*Online